

## 嵐

梅  
崎  
春  
生

目を上げると、今まで芝生に影を投げて居たにれの木が、葉一つ一つに濕氣を含み今は雲の影におされて、影は芝生の中に吸ひ込まれる。此の風は芝生の一本一本を揺り動かすのだらうか。風の意志は此の揺り動かされる芝生の様な俺の心にのぞみ、嵐を畏れながらもいらだち待つ心だ。庭にはは

たはたと洗濯物があふり、清潔な曹達の匂  
ひを大地にふり落す。雲足の速さは刻々に  
れの皮をかぎろはせ、俺の心は一枚の濡れ  
た旗となる。嵐の豫感に今縁に立てば遠景  
をわたる風の意志は、遠景の樹々の屈服を  
強ひつつ。おお、これの木は争闘の前の亢奮  
に我を忘れて葉をざわめかす。縁に立つて  
双手を伸し、嵐を望み待つ俺の心は、はた  
はたはたと聲をあげて手もふるふ程の緊張  
の中に今影の様に、嵐は大きな手を擴げて  
渡つて来る。